



Title	カーシム・アミンと『女性の解放』：(1)『女性の解放』出版に至るまで
Author(s)	竹田, 新
Citation	アラブ・イスラム研究. 2008, 6, p. 95-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105884
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カーシム・アミンと『女性の解放』

—— (1)『女性の解放』出版に至るまで ——

竹田 新*

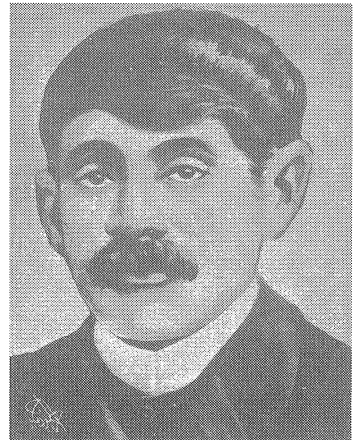
I.

エジプトの法曹家カーシム・アミン Qāsim Amīn は、1899年に『女性の解放』*Tahrīr al-mar'ah* という自国のムスリマをめぐる書を世に問うた。この作品は、ナショナリズムと近代主義という文脈の中で書かれたものであったが、女性問題を一躍、公の場に引き出し、エジプト社会を中心に大きな反響を呼ぶ。

そしてこの女性論のゆえに、彼はしばしば、エジプト（そしてアラブ）・フェミニズムの父あるいはパイオニアと称されてきた¹⁾。ところが最近、特に女性の研究者たちから、こうした捉え方に疑問を呈する声も上がっている²⁾。

そこで本資料紹介では、女性解放に関するアミンの思想がいかなるもので、いかなる変遷を遂げるのかを再検証してみたい。今回は、この『女性の解放』出版に至るまでの彼の歩みをその時代背景と共に振り返る。

なお、アミン自身の作品からの情報が少ないので、彼に関する伝記や研究書に主に頼らざるをえないこと、また、註により具体的な説明を付するので、本文より註の方が多くなること、この2点を予めお断わりしておく。



〈カーシム・アミン〉

II.

カーシム・アミンはトルコ系の軍人ムハンマド・アミン Muḥammad Amīn を父に³⁾、上エジプト出身のアハマド・ハッターブ Aḥmad Khaṭṭāb [ムハンマド・ア

* 大阪大学世界言語研究センター 教授

1) 20世紀前半にエジプトとアラブの女性運動を牽引リードしたホダー・シャアラウィー Hudā Shaʿrāwī (1879-1947) が彼を「女性の擁護者」と呼んでいたことは周知の事実であるが、Haykal [1929:164] や、ホダー・シャアラウィーの見解に従った Adams [1933:231]をはじめ、Bohdanowicz [1951:24-5]、Gerner [1984:75]、Haddad [1984:143]、Abdel Kader [1987:8]、Baraka [1988:49]、Nelson [1996:311]、Goldschmidt Jr. [2000:22] などの説である。

2) Ahmed, L. [1992:162-3]、Baron [1994:4]、El Guindi [1999:61, 63] に見られる。

3) Zaydān [(1902), 1970:426]、al-Sayyid [1917, p.45]、Haykal [1929:165] といった20世紀前半の伝記

ミーンの友人] の娘を母に、1863年12月1日、アレクサンドリア al-Iskandariyah、あるいはカイロ al-Qāhirah 近郊のトラ Ṭurah に生まれた⁴⁾と考えられる。

彼の幼児期のことはよく分かっていない⁵⁾が、8歳の頃には家族がアレクサンドリアに住んでおり、彼は当地の特権階級子弟用のラアス・アッティーン Ra's al-Ṭīn 初等学校に通っている⁶⁾。彼はこの学校を卒業すると、家族がカイロに移った⁷⁾ので、カイロの王立予備学校〔当時中等教育機関〕に入り、フランス語を専攻することになった。そしてこの予備学校の後、さらに、王立法律・行政学校〔当時の高等教育機関〕に進み、81年10月24日に法律の学位を取得した⁸⁾。またこの王立法律・行政学校時代に、パン・イスラーム主義者アフガーニー Jamāl al-Dīn al-Afghānī (1838-97) の思想に共鳴し、そのサークルに参加していたらしい⁹⁾。

は、カースィム・アミーンをクルド系と記していたが、Khākī [(1944), 1973:2, 18] 以来、Fahmī [1963:28]、Sakākī [1965:15]、ʿImārah [(1976), 1989:20] ほかアラブ人研究者の多くがカースィム・アミーンをトルコ系と唱えるようになった。しかしながら、異論も主に欧米の学者たちの間で見られる。例えば、Bohdanowicz [1951:26] は、アミーンをトルコ系、あるいはおそらく、より正確にはクルド系だと考え、al-Ziriklī [(1954), 1979:V 184]、Kaḥḥālāh [1957-:VIII 114]、Hourani [1962:164]、Drewes [1966:51]、Philipp [1978:291]、Goldschmidt Jr. [2000:22]などは、クルド人説を取っている。このクルド人説は、ムハンマド・アミーンの一族あるいは彼自身がオスマン帝国下にあったクルディスターンのスライマーニーヤ al-Sulaymānīyah の統治者 (但し、トルコ系と考えられる) であったことから生じたものであろう。Khākī [(1944), 1973:2, 18] とそれに従う Fahmī [1963:29] や、Abū Hamdān [1993:15] を参照。そして、このムハンマド・アミーンは、イスタンブール滞在中にクルディスターンで独立への反乱が発生したため、スライマーニーヤに戻れなくなり、オスマン帝国から代わりとして下エジプトのダマンフル Damanhūr の近くにイクター iqtāʾ (分与地) を与えられた。そこで、彼はエジプトに移り住み、ヘディーヴ khidīw (エジプト副王) のイスマーイール Ismāʿīl (在位1863-79) に軍人として仕えることになり、最終的には、連隊 (あるいは旅団) 長にまで昇進したのである。

- 4) ʿImārah [(1976), 1989:21] やそれを踏襲する al-Dusūqī [2004:11] は、母が滞在していたアレクサンドリアか父が当時駐屯していたトラのどちらかとするが、Fahmī [1963:30]、Bahāʾ al-Dīn [(1970), 1993:7]、Rizzitano [1978:720]、Awad [1986:101]、Abdel Kader [1987:54]、Kurzman [2002:61] などはアレクサンドリア、Khākī [(1944), 1973:1-2]、al-Ziriklī [(1954) 1979:V 184]、Kaḥḥālāh [1957-:VIII 114]、Sakākīnī [1965:15]、Goldschmidt Jr. [2000:22] などはトラ説をとる。
- 5) Fahmī [1963:31] や Bahāʾ al-Dīn [(1970), 1993:7-8]、Awad [1986:101]、al-Shaykh [1994:15] などの説では、カースィムは母の里帰り中にエジプトで生まれはしたが、父がエジプトにイクターを与えられてイスマーイールに軍人として仕えるようになるのはカースィムが8歳の時であり、それまでは家族でスライマーニーヤとイスタンブールに住んでいた。他方、Zaydān [(1902), 1970:427]、Khākī [(1944), 1973:1-2]、Sakākīnī [1965:15-6]、ʿImārah [(1976), 1989:20-1] とそれに従う Cole [1981:394]、al-Dusūqī [2004:11] などは、父がイスマーイール時代にエジプトで軍務に就いてからカースィムが生まれたと考えているようである。なお、カースィムは長男であり、イブラーヒーム Ibrāhīm という2歳違いの弟などもいたらしい。
- 6) Heyworth-Dunne [1939:348] に従えば、この学校は、ヘディーヴ・イスマーイールによる最初の近代的教育の初等学校である。
- 7) 当時のカイロの高級住宅地地区の一つヒルミーヤ al-Ḥilmīyah に移り住んだらしい。
- 8) Khākī [(1944), 1973:3]、Fahmī [1963:33]、Sakākīnī [1965:16]、Bahāʾ al-Dīn [(1970), 1993:8]、ʿImārah [(1976), 1989:] や al-Dusūqī [2004:12] などは、カースィム・アミーンがその年の主席で卒業したと記す。
- 9) Fahmī [1963:34]、Bahāʾ al-Dīn [(1970), 1993:9]、ʿImārah [(1976), 1989:21]、Rizzitano [1978:720]、Awad [1986:101]、Abdel Kader [1987:55]、al-Dusūqī [2004:12] などの説である。そして、Bahāʾ al-Dīn によれば、アミーンはカイロの下町イズベキヤー al-Azbakīyah 地区にある喫茶店マターティヤー Matāṭīyā に入出入りし、そこでのアフガーニーが主催する討論会に参加していた。そして、Fahmī などに従えば、このアフガーニーのサークルにおいて、本文で後述する、ムハンマド・アブドゥ

アミーンは上記の学校を卒業後、父が既知であったトルコ系のムスタファー・ファフミー Muṣṭafā Fahmī (1840-1914) [後に首相を務める]¹⁰⁾ の法律事務所で暫時、実習を行ってから、エジプト政府の留学生として4年間の奨学金を得てフランスへ渡り、モンペリエ Montpellier のコレージュ・ユニヴェルシテールで法律の勉強を続けることになった¹¹⁾。

1882年7月イギリス軍が「オラービー革命 al-Thawrah al-ʿUrābiyah」運動に介入して アレクサンドリアを砲撃した時、彼アミーンはフランスにいた。同年9月のイギリスによるエジプト占領に憤慨し、祖国の行く末に不安を抱きながらも、勉学を継続し、84年からは、このフランスにいわば亡命中であったアフガーニーとその弟子・同志ムハンマド・アブドゥ Muḥammad ʿAbduh (1849-1905) によるパン・イスラーム主義の週刊紙『固き絆』 al-ʿUrwah al-wuṭṭqā の発行を手伝い、ムハンマド・アブドゥのためにフランス語の「通訳」も務めた。



〈ムハンマド・アブドゥ〉

また、アミーンはこの地で、ヴォルテール Voltaire (François Marie Arouet, 1694-1778)、ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-78) ほかの思想を肌で感じると共に、ダーウィン Charles Robert Darwin (1809-82)、マルクス Karl Marx (1818-83)、ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900)などのヨーロッパの偉大な思想家たちの著作を読んだと言われる¹²⁾。さらに、モンペリエでは、スラヴァ Slava というフラン

Muḥammad ʿAbduh (1849-1905)、サアド・ザグルール Saʿd Zaghlūl (1859?-1927)、ファトヒー・ザグルール Aḥmad Faṭḥī Zaghlūl (1863-1914)、アブドゥッラー・ナディーム ʿAbd Allāh al-Nadīm (1845-96)、シリア出身のアルメニア系キリスト教徒アディーブ・イスハーク Adīb Ishāq (1856-85) などと知り合った。なお、アフガーニーは1879年8月にエジプトから追放される。

10) ムスタファー・ファフミーは外相、蔵相、内相などを歴任後、1891-3年と1895-1908年という長期間、エジプトの首相を務める。まさに、アミーンがエジプト法曹界の重鎮を務める時期である。また、ファフミーの娘のサフィーヤ Saḥīyah (1876-1946) は、アミーンの法曹界での同僚で親友でもあるサアド・ザグルールと結婚する。

11) この渡仏を、Khākī [(1944), 1973:2, 53]、ʿImārah [(1976), 1989:21]、Cole [1981:394]、Abū Ḥamdān [1993:18]、al-Dusūqī [2004:12]、Pollard [2005:153] と同様、81年と考えるが、Awad [1986:101]、Abdel Kader [1987:55]、Nelson [1996:27] は82年説をとる。

12) 彼が読んだフランスの文人・思想家などについて、Khākī [(1944), 1973:53] は研究者たちの説として、ルソー、ラマルティーヌ Lamartine (1790-1869)、ヴォルテール、フェヌロン Fénelon (1651-1715)、ジュール・シモン Jules François Simon (1814-96) を挙げる。そのほか、アミーンの『エジプト人』 *Les Egyptiens* (1894) [Aʿmāl:266] と『新しい女性』 *al-Marʾah al-jadīdah* (1900) [Aʿmāl:431] にユゴー Victor Hugo (1802-85)、『エジプト人』 [Aʿmāl:282] と『女性の解放』 [Aʿmāl:343] にルナン Ernest Renan (1823-92)、『女性の解放』 [Aʿmāl:343] と『新しい女性』 [Aʿmāl:473] にドーデ Alphonse Daudet (1840-97) がそれぞれ登場しており、彼らの著作もこのフランス留学中に読んでいたのではなかろうか。ダーウィン、マルクス、ニーチェは、ʿImārah [(1976), 1989:22]、Abdel Kader [1987:55]、Abū Ḥamdān [1993:47]、al-Shaykh [1994:18]、al-Dusūqī [2004:12] などの言及による。

ス人の女友達を得たらしい¹³⁾。

この頃、アミーンの母国エジプトでは、すでにタフターウィー Rifāʿah Rafīʿ al-Taḥṭāwī (1801-73)、アリー・ムバーラク ʿAlī Mubārak (1823-93) など啓蒙的なムスリム知識人がアミンより前に、女子教育の重要性、多妻や離婚の制限などを説いていた¹⁴⁾。また、アーイシャ・タイムール ʿĀʾishah al-Taymūrīyah (1840-1902) やマルヤム・ナッハース Maryam al-Naḥḥās (1856-88) [現レバノン出身のキリスト教徒] など女性知識人も、女性の地位向上を訴えていた¹⁵⁾。

そして、エジプト国内での実際の女子教育について言うと、すでに1832年、官立の女子医学校〔一般に助産婦学校として知られる〕が設立され、35年（あるいは30年代）には女子向けのミッション・スクール、53年（あるいは60年代）にはエジプト人によ

なお、『新しい女性』に登場するスペンサー Herbert Spencer (1820-1903) [Aʿmāl: 492, 506]、ミル John Stuart Mill (1806-73) [Aʿmāl: 430, 477]、マンテガッツァ Paolo Mantegazza (1831-1910) [Aʿmāl: 443, 451] など、このフランス留学中に読んだものではなかろうか。Fahmī [1963: 41] 参照。

13) コレージュ・ユニヴェルシテールの同級生であるスラヴァとの関係については、Abū Ḥamdān [1993: 20-2]、Bahāʾ al-Dīn [(1970), 1993: 11] が詳しい。

14) タフターウィーとアリー・ムバーラクは共に、アミンより前にフランスへの留学体験を持つ人物であり、アリー・ムバーラクは68年、『アラビア語を読むための綴りと練習への道』*Ṭarīq al-hijāʾ wa-al-tamrīn ʿalā al-qirāʾah fī al-lughah al-ʿarabīyah* を著し、その中で、女子教育の必要性、結婚の知恵、一夫多妻に関する事柄などを述べ、また、タフターウィーは72年に『女子と男子のための信頼のおける導き』*al-Murshid al-amīn li-l-banāt wa-al-banīn* を執筆し、男子と同じように、女子をも教育することは調和の取れた結婚を可能にし、必要な場合には「男性が就いているような職に女性も就き、その力と能力の限界までその仕事に従事することを可能にする」と述べている。この両書については、Cannon [1985: 469-71] なども参照。そのほか、タフターウィーの『現代の礼儀作法の喜びに関するエジプト的精神のための道筋』*Manāḥij al-albāb al-miṣrīyah fī mābāḥij al-ādāb al-aṣrīyah* (69年) にも女子教育、アリー・ムバーラクの『アラムッディーン』*ʿAlam al-Dīn* (82年) にもヴェールや一夫多妻などに関する言及がある。なお、タフターウィーのフェミニズムについては Charles Viel, “Rifāʾa al-Taḥṭāwī (1801-1873), précurseur du féminisme en Egypte,” *Maghreb Machrek* 87 (Janvier-Mars 1980) が詳しい。さらには、この両名のほか、アミンの思想的な師になるアブドゥム、「オラービー革命」失敗後にエジプトを追放される1882年12月より前の81年3月、『エジプトの出来事』*al-Waqāʾiʿ al-miṣrīyah* 紙に「人間の結婚の必要性」、「多妻に関するイスラーム法の判断」といった論説を書き、一夫多妻制を批判している。

15) 詩人として有名なアーイシャ・タイムールは、Khalīfah [1973: 32] に従えば1877年 (Ahmed, L. [1992: 140] によれば1874年) に、あるいは出版された92年までに『諸事に関する熟考の鏡』*Mirʾāt al-taʾammul fī al-umūr* という小作品を発表し、上流階級の男性たちの妻の扱いを批判して、男性が女性の保護者としての役割を等閑にしていると述べた。それに対して、アブドゥッラー・ファイユーミー ʿAbd Allāh al-Fayyūmī (1900年以後没) は1892年、後に『諸事に関する熟考の鏡』に対する大衆の舌』*Lisān al-jumhūr ʿalā Mirʾāt al-taʾammul fī al-umūr* という小冊子になる一連の反論を『ニール (ナイル)』*al-Nīl* 紙に寄せた。また、アーイシャは88 (あるいは89) 年には、『アードーブ (礼儀作法)』*al-Ādāb* 紙に「教育の時代」を書き、女性の教育を訴えている。なお、彼女の代表的文学作品としては、87-8年に出版された『言動に関する事柄の結果』*Natāʾij al-aḥwāl fī al-aqwāl wa-al-aʿfāl* がある。次に、マルヤム・ナッハースは73-9年に『著名な女性の伝記に関する美人のステージ』*Māʾriq al-ḥasnā fī tarājīm mashāḥūr al-nisāʾ* という女性人名辞典を出版し、後述するエジプト最初の官立女子初等学校を創設した王妃チェシム・アーフェト Jashm ʿĀfat Ḥānīm Afandī に捧げた。なお、エジプトで (そして、アラブ世界でも) 最初の女性ジャーナリストは、1865年に医学雑誌『医学の長』*Yaʿsīb al-ṭibb* に幾つかの記事を書いたガリーラ・タムラハーン Jalīlah Tamrahān (1899年没) である。彼女は次の註で述べる女子医学校の卒業生の一人で、1871年には『助産の正しいガイド』*Muḥkam al-dalālah fī aʿmāl al-qibālah* を出版した [Khalīfah, 1973: 23, 74-75, 104, 132]。

る私立の女学校が開設され、73年には官立の女子初等学校が開校していた¹⁶⁾。

1885年、アミーンは優秀な成績で法律の勉強を修了すると、4年間ほどの留學生活を終えて8月25日、エジプトに戻って来た。同年12月1日には混合裁判所に採用されたが、この前後に、父ムハンマド・アミーンが亡くなっただけで、87年9月22日に、カースィム・アミーンは検察局に移り、親友になるファトヒー・ザグルール *Aḥmad Faṭḥī Zaghlūl* (1863-1914)¹⁷⁾ と共に働くことになった。

その後、アミーンは89年6月、上エジプトのベニ・スエフ *Banī Suwayf* の検事正に昇進し、91年に下エジプトのタンタ *Ṭanṭā* の検事正に転じると、9年以上に及ぶ潜伏の末に逮捕された「オラービー革命」の情熱的な代弁者アブドゥッラー・ナディーム *ʿAbd Allāh al-Nadīm* (1845-96)¹⁸⁾ を尋問し、ナディームの減刑〔従来の死刑からシリアへの追放刑へ〕に尽力した。

アミーンは翌92年6月26日には、ファトヒー・ザグルールの兄でやはり親友になるサアド・ザグルール *Saʿd Zaghlūl* (1859?-1927)¹⁹⁾ などと共に控訴裁判所の次席判事に任命され、94年には、参事官の地位に昇り²⁰⁾、生涯、その職を務めることになる。

この90年代になると、エジプトでは、ザйнаブ・ファウワーズ *Zaynab Fawwāz* (1860?-1914)〔現レバノン出身のシーア派ムスリム〕が新聞・雑誌で女性の政治的権利ほかを訴え、ヒンド・ナウファル *Hind Nawfal* (c.1860-1920)〔現レバノン出身のキリスト教徒〕が初の女性雑誌『乙女』*al-Fatāh* を発行するなど、女性のジャーナリズムへの進出が活発になる²¹⁾。

16) 1832年、エジプトのワリー *wālī* (総督) ムハンマド・アリー *Muḥammad ʿAlī* (在位1805-48) は主治医のフランス人クロット・ベイ *Clot Bey* (Dr. Antoine Barthélemy, 1793-1868) に命じて、男子の医学校付属として3年制の女医 (*ḥakīmah*) 養成学校 (一般に、助産婦学校と呼ばれる) を開設した。1835年、あるいは30年代 [Badran, 1995:9] に、イギリス人 Alice Lieder (旧姓 Holliday, 1868年没) の手によって、エジプト初の、私立の女学校 (ミッション・スクール) がカイロに開かれた。1836年 ムハンマド・アリーは国家による女子教育制度を検討するよう公教育審議会を発足させたが、失敗に終わる。1853年、あるいは60年頃 [Khalīfah, 1973:101] あるいは60年代 [Russell, 2004:115]、コプト正教総主教キュリロス *Kīrillus* 4世 (1816-61、在位1854-61) が同教徒用の女学校をカイロに2校開設したが、これがエジプト人女子のためにエジプト人自身が設立した初のヨーロッパ式の学校であった。1873年、ヘディーヴ、イスマーイールは第3夫人チェシュム・アフメトに命じて、エジプト最初の官立女学校をカイロのスューフィーヤ *al-Suyūfiyah* 地区に開設 (スューフィーヤ校として知られ、79年にサニーヤ *al-Sanīyah* 校と改名) した。これは初等教育機関であり、アラビア語、トルコ語、宗教 (イスラーム)、図画、ピアノ、裁縫を教えた。以上、Heyworth-Dunne [1939:132, 272, 275-6 ほか]、Khalīfah [1973:100-7]、Yahyā [1983:63-9, 75-85]、Ahmed [1992:133-7]、Baron [1994:122-43]、Russell [2004:100-16] など を参照。

17) アミーンは『女性の解放』と『新しい女性』の中で、「私の友人アフマド・ファトヒー・ベイ・ザグルール *Aḥmad Faṭḥī Bek Zaghlūl*」と言う [ʿAmāl:382,492]。

18) このナディームも1881年、彼自身の週刊紙、『風刺と叱責』*al-Tankū wa-al-tabkū* (アレクサンドリア) で女性隔離を扱っている。

19) アミーンは『新しい女性』のはじめに、この著を「私の友人サアド・ザグルール *Saʿd Zaghlūl* に献呈」と記す [ʿAmāl:419]。

20) *Kḥakī* [1973:6] によれば、参事官の年給は1000エジプト・ポンドであった。

21) ザйнаブ・ファウワーズはナショナリストであり、『ニール』紙、『ムアイヤド (支持される者)』*al-Muʿayyad* 紙、『ファター (乙女)』*al-Fatāh* 誌などに、女性の権利に関する意見を発表した。例えば、1892年、『ニール』紙に、イギリスはエジプト人の男女すべてに教育の機会を与え、卒業者に対して職を提供することを要求した。ザйнаブは新聞と雑誌への投稿のほか、94-95年に

アミン自身も活動の場を、法曹界だけでなく、言論界にも広げてゆき、94年に『エジプト人：ダルクール公爵に答えて』*Les Egyptiens: Réponse à M. le Duc d'Harcourt* という、フランス語の作品を著した。これは、フランス人のダルクール公爵 Le Duc d'Harcourt がエジプト人の状態を否定的に描いてイスラームをエジプトの後進性の原因とみなした作品『エジプトとエジプト人』*L'Égypte et les Egyptiens* (1893) へのナショナリスト、アミンとしての反論であり²²⁾、序、エジプト人、エジプト社会、エジプト人の戦闘能力、奴隷制、政府、女性、多妻制、離婚、愛情、宗教、道徳、イスラームと教育、科学と文芸、ヨーロッパ、結の、16章からなっていた。この本は女性に関する慣習など、ムスリム・エジプトの現状を肯定する内容であり、彼はヨーロッパ社会の男女の交わりを攻撃し、エジプト社会のヒジャーブ hijab (女性のヴェールと男女の隔離) を是認し、女性の役割りは家庭に留まることだと考え、離婚における男性の自由を擁護し、エジプトの女性は自分たちの諸権利を享受していると主張した²³⁾。

ところが、この作品を読んだ王女ナズリー・ファーズィル Nāzīlī Fāḍīl (1853-1913) は怒り、彼女の主催するサロンでアミンの師に当たるムハンマド・アブドゥに激しい言葉を投げかけた。そこでアブドゥやサアド・ザグルールはアミンをこのサ

は、『女性部屋の主たちの世代別の伝記に関する散りばめられた真珠』*al-Durr al-manthūr fī ṭabaqāt rabbāt al-khudūr* という女性人名辞典 (東洋と西洋の456名の女性の伝記) も編んでいる。また、ヒンド・ナウファルは、前記のマリヤム・ナッハースの娘であり、92年11月20日、『ファター (乙女)』という、アラブ世界初の女性向けの月刊誌をアレクサンドリアで発刊した。同誌の関心は政治や宗教にあるのではなく、女性が興味を持つものすべて一科学、文学、マナー、道徳、教育、衣服、ファッション、裁縫、絵画、家事、育児などであると主張し、アラブ世界の様々な地域からの女性たちに投稿の機会を与えた。しかし、この雑誌は彼女の結婚後まもなく94年3月に停刊 (実際は廃刊) となる。なお、ジャーナリズムへの女性の進出は、すでに80年代後半に活発になりつつあり、前述のアーイシャ・タイムールのほか、例えば、86-88年に、『ムクタタフ (選り抜き)』*al-Muṭṭaṭṭaf* 紙にヤアクーブ・サッルーフ (『ムクタタフ』の共同編集者) 夫人 Madām Yaʿqūb Ṣarrūf が女性像について、88年には、『ラターイフ (機知)』*al-Laṭāʾif* 紙にマリヤム・マカリウス Maryam Nimr Makāriyūs (1888没、『ラターイフ』の編集者シャーヒン・マカリウス Shāhīn Makāriyūs の妻) が育児について記事を載せている。

- 22) Khākī [(1944), 1973:71] によれば、アミンはこの本を読んで非常にショックを受け、10日も寝込んだという。アミンとダルクール公爵の書の関係・影響については、Khākī [(1944), 1973: 64-79]、Fahmī [1963:101-15] が詳しい。こうした行動 (ヨーロッパ人による反イスラーム的な見解に対してムスリム側が反論すること) は、アミンより前にすでに見られており、例えば、アフガーニーはルナン Ernest Renan (1823-92) が「イスラームと科学」[*Journal des Débats* (Paris), Mars 29, 1883] 中で見せたイスラームとアラブ人に対する辛辣な攻撃に対して、「ルナンに対するジャマールッディーンの返答」(アラビア語で書かれ、出版のためにフランス語へ翻訳された) [Journal des Débats, Mai 18, 1883] という反論を行っている。当時、フランスにいたアミンは、このルナンとアフガーニーとの論説を知っていたことはほぼ間違いなく、ダルクール公爵への反論は、自分の師とも言えるアフガーニーに倣った行為ではなからうか。アミンの『エジプト人』[Aʿmāl:282] 参照。ちなみに、アミンの直接の師であるアブドゥも、その師アフガーニーにやはり倣ったのか、1900年にフランスの元外相アノトー Gabriel Hanotaux (1853-1944) が行なったイスラームの諸原則への攻撃に対して、その反論を『ムアイヤド』紙に掲載する [al-Muʿayyad, May 6, 13 1900]。

- 23) 前文から Kassem Amin, *Les Egyptiens : Réponse à M. le Duc d'Harcourt*, Le Caire: Jules Barbier, 1894 [Aʿmāl:221-307]。

ロンに連れてきて、彼女の前で彼を謝らせたと言われる²⁴⁾。

このサロンには、当時、アブドゥとサアド・ザグルールのほか、ファリス・ニムル Fāris Nimr (1856-1951) [現レバノン出身のキリスト教徒]、イブラーヒーム・ヒルバーウィー Ibrāhīm al-Hilbāwī (1858-1940)、ファトヒー・ザグルール、後述する『ムアイヤド (支持されるもの)』*al-Mu'ayyad* 紙の発刊者アリー・ユースフ 'Alī Yūsuf (1863-1913)、ダーウッド・バラカート Dāwūd Barakāt (1870-1933) [現レバノン出身のキリスト教徒]、ハーフィズ・イブラーヒーム Ḥāfiẓ Ibrāhīm (1871-1932) といったリベラルな知識人が出入りし、活発な議論を展開していた²⁵⁾。



〈ナズリー・ファーズィル〉

- 24) ダーウッド・バラカート Dāwūd Barakāt とファリス・ニムル Fāris Nimr の証言に基づき、Fahmī [1963:136]、'Imārah [(1976), 1989:121]、Abū Ḥamdān [1993:112-21]、Badran [1995:18] など。なお、ナズリー・ファーズィルは、ヘディーヴ、イスマーイールの弟ムスタファー・ファーズィル Muṣṭafā Fāḍil (1830-75) の娘であり、ムハンマド・アリーの子孫に当たる。フランス式の教育を受けた後、オスマン帝国の外交官僚ハリール・シャリーフ Khalīl Sharīf Pāshā と結婚し、パリなどで暮らした。この夫の死後、1880年代にイギリス占領下のエジプトに戻り、当時の高等弁務官 (エジプトの実質的な統治者) クローマー卿 Lord Cromer (1841-1917、在任1883-1907) などと親交を結び、自宅にフランス流の文芸サロンを開いた。また、彼女は『ムクタタフ』紙に96年12月、女性の権利に関するエッセイを載せるなど、文筆活動も行なった。そのほか、アミンが後年にサアド・ザグルールに代わって力を注ぐエジプト大学設立運動のために、彼女は自分の土地や財産の一部を寄付している。そして、99年にチュニジアを訪れた後、当地で有力者ハリール・ブーハージブ Khalīl Bū Ḥājib と再婚して暮すようになり、エジプト時代と同様、サロンを開くなどの啓蒙的活動を13年間にわたって展開する。
- 25) Fahmī [1963:136]、Sakākīnī [1965:25]、Allen [1969-70:79]、Khalīfah [1973:27]、'Imārah [(1976), 1989:120-1]、al-Shinnāwī [1982:40-48] ほかを参照。ファリス・ニムルは『ムクタタフ』紙の発刊者、イブラーヒーム・ヒルバーウィーは法律家でアミンの親友、『新しい女性』A'māl:481, 482]、ダーウッド・バラカートは『アハラーム (ピラミッド)』*al-Ahrām* 紙の編集者、ハーフィズ・イブラーヒームは「ナイルの詩人」(愛国詩人) である。この文芸サロンには、上記の人物のほか、過去も含めると、ムハンマド・シャリーフ Muḥammad Sharīf (1826-87)、ムスタファー・リヤード Muṣṭafā Riyād (1834-1911)、コプト正教徒のブトルス・ガーリー Buṭrus Ghālī (1846 or 49-1910)、[以上、Allen, 1969-70:79]、フセイン・ルシュディー Ḥusayn Rushdī (1863-1928) [Badran, 1995:18-19]、といった政治家をはじめ、前述のアディーブ・イスハーク [Khalīfah, 1973:27]、チュニジア出身のムハンマド・バイラム Muḥammad Bayram (1840-89) ['Imārah, (1976), 1989:120-1, Yūsuf, 1978:72]、イブラーヒーム・ムワイリヒー Ibrāhīm al-Muwayliḥī (1846-1906) とその子ムハンマド・ムワイリヒー Muḥammad al-Muwayliḥī (1868-1930) [Allen, 1969-70:79]、アブドゥルカリーム・サルマーン 'Abd al-Karīm Salmān (1849-1918) [Fahmī, 1963:136]、イブラーヒーム・ラッカーニー Ibrāhīm al-Laqqānī [Sakākīnī, 1965:25, Allen, 1969-70:79, Yūsuf, 1978:72] などの文人たちも参加していた。なお、この1890年代には、女性たちも参加するサロンが、フセイン・ルシュディーと離婚したフランス出身のユージェニー・ブラン Eugénie Le Brun (1908年没) によって開かれ、王女ナズリー・ファーズィル、アーイシャ・タイムールをはじめ、後のエジプト女性運動の指導者ホダー・シャアラウィーなども出入りしていた。

アミーンはこのサロンで討論するうちに、ナズリー・ファーズィルという女性と彼女を取り巻く進歩的男性知識人たちの考えに引かれて、次第に女性に対する見方を改め、女性解放論者としてのナショナリストへと変わってゆく。

また、アミーンはこの94年、『エジプト人』を書き上げた後に、父の友人であったトルコ人提督、アミーン・タウフィーク Amīn Tawfīq の娘ザイナブ Zaynab と結婚した。このザイナブはイギリス人の乳母に養育された女性であり、彼女との結婚もアミーンに女性観を変えさせる契機となったと考えられる。ちなみに、アミーン自身は2人の娘を持つことになるのだが、一方はフランス人の乳母、他方はイギリス人の乳母がつくのである。

さらに、この94年には、コプト正教徒である弁護士ムルクス・ファフミー Murqus Fahmī (1870-1954) が、近代エジプト初の女性解放論と言われる²⁶⁾『東洋の女性』*al-Mar'ah fī al-sharq* という戯曲を書き、家庭での女性に対する家父長的な横暴を批判し、こうした横暴はいずれの宗教も認めていないと主張した。そして、ムスリムとコプト教徒との通婚の合法化、一夫多妻制の全面禁止など、家族法の世俗化を訴えた²⁷⁾。

この作品はアミーン的女性論にかなりの影響を与えたと考えられる²⁸⁾が、作者が宗教的少数派のしかも青年であったこともあり、さほど世間の注目を集めなかった。

次の95年になると、アミーンはダルクール公爵の書を再検討してエジプトの社会的病理について深く考えた結果を、エジプト人ムスリムの主張を載せる『ムアイヤド』紙²⁹⁾に無署名で発表し始めた。それらは98年まで続き、15篇からなる「原因と



〈彼の妻ザイナブ〉

26) Sufūrī [1928:685], Yūsuf [1978:73], Badran [1988:17].

27) 前文と共に、Badran [1995:17-8, 129].

28) 後述するタラアト・ハルブ Muḥammad Talʿat Harb (1867-1941) も注目しており、彼はアミーンの『新しい女性』への反論として有名なその著『女性とヒジャーブに関する結語』*Faṣl al-khiṭāb fī al-mar'ah wa-al-hijāb* (1901) [Harb, 1901:1, 7, 14-5] において、アミーンをムルクス・ファフミーの考えの剽窃者とみなし、アミーンとムルクス・ファフミーの両者を攻撃している。また、後述する、ムハンマド・アブドゥヤルタフイー・サイイドなど、アミーンの『女性の解放』に関与したと見られる人々も、ムルクス・ファフミーのこの作品に注目したと考えられる。Badran [1995:18] を参照。なお、アミーン的女性論に影響を与えた人物として、Khākī [(1944), 1973:96] や al-Khuḍayrī [1987:32] は、インドのイスラーム改革主義者アミール・アリー Sayyid Amir Ali (1849-1928) の名も挙げる。Aʿmāl:483, 493 も参照。

29) 近代エジプトにおける最初の指導的なムスリム・ジャーナルである『ムアイヤド』紙は、1889年12月、アリー・ユースフによって創刊された。イギリスによるエジプト占領に反対する立場から、当初は、時の首相ムスタファー・リヤードや、ムハンマド・アブドゥと彼のイスラーム改革主義グループの、1892年以後は、主にヘディーズ、アッバース・ヒルミー ʿAbbās Ḥilmī 2

結果」Asbāb wa-natā'ij と、5篇からなる「道徳と訓戒」Akhlaq wa-mawā'iz³⁰⁾ になった。「原因と結果」は、前半がエジプトの経済、後半がエジプト人の教育に関する論説で、このうち、後者（教育）においては、教育の基礎として宗教・愛国心・良心を提示し、エジプトの教育の欠点としての自己愛・怠惰・軽視を指摘する。そして幼児教育の重要性を説き、エジプトの母親たちの無知を嘆く。また、「道徳と訓戒」は全篇、公職とナショナリズムの関係を念頭に、エジプトの公職者のあるべき姿を論じる。どちらの論説も現状の改善を訴えるものであった³¹⁾。

なお、この間の97年に、アミンは師に当たるムハンマド・アブドゥ、ルトフィー・サイイド Aḥmad Luṭfī al-Sayyid (1872-1963)、サアド・ザグルールと共にジュネーヴ Genève に滞在し、彼らの協力を得て、『女性の解放』の草稿を一部分まとめたとも言われる³²⁾。

そして99年、アミンは5月に『女性の解放』の内容を『ムアイヤド』紙に3回にわたって掲載した³³⁾ 後、それらをまとめてカイロのタラッキー書店 Maktabat al-Taraqqī から1冊の本として出版し³⁴⁾、エジプトの言論界を熱い議論の渦の中に巻き込むことになる。

ちなみに、この90年代後半には、前述のヒンド・ナウファルの後、アレクサンドラ・アヴィエリノ Alexandra (Alikandrah) Avierino (1872-1927) [現レバノン出身のキリスト教徒] やエステル・モヤール Esther (Istir) Moyāl (1873-1948) [現レバノン出身のユダヤ教徒] といった女性編集者による女性雑誌が、アミンも取り扱う教育・結婚・離婚・ヴェール着用、その他の関連する主題を取り上げ、多くの有名・無名の男性と女性がこれらの議論に参加していた³⁵⁾。

世 (在位1892-1914) の支持を受けた。Kelidar [1981] を参照。

30) Khakī [(1944), 1973:7] や Sakākīnī [1965:32] は後者を「道徳と訓戒」Akhlaq wa-mawā'iz ではなく、「金言と訓戒」Ḥikam wa-mawā'iz とする。

31) 「原因と結果」A'māl:170-206、「道徳と訓戒」A'māl:208-17。

32) al-Sayyid [1962:37] をはじめ、Shafīq & 'Abduh [1945:75]、Fahmī [1963:158-9]、'Imārah [(1976), 1989:125]、Faraj [1985:19]、al-Khuḍayrī [1987:33] などの説。ただし、al-Sayyid [1968:187] は、この話を96年とする。また、Smith [1983:23] (イブラーヒーム・ヒルパーウィーの証言に基づく?)によれば、『女性の解放』はムハンマド・アブドゥの弟子ムスタファー・アブドゥッラーズィク al-Shaykh Muṣṭafā 'Abd al-Rāziq (1885-1947) の家で、カーシム・アミンとサアド・ザグルールとイブラーヒーム・ヒルパーウィーがしばしば会ってなされた議論の産物でもある。

33) 『ムアイヤド』紙に5月15日、5月20日、5月28日の3回にわたって掲載された。

34) この『女性の解放』に関しては、稿を改めて紹介するが、少しでも触れて置く。アミンの『女性の解放』は、エジプト社会を改革する一環として、イスラームの枠内での女性に対する改革を主張し、女子教育、ヴェール・女性隔離、複婚、離婚といった問題を扱い取り上げ、I: 序、II: 女性のタルビヤ tarbiyah (養育・教育)、その1: 社会的機能、その2: 家族的機能、III: 女性のヒジャーブ (ヴェール、隔離)、その1: 宗教的観点、その2: 社会的観点、IV: 女性と国、V: 家族、その1: 結婚、その2: 多妻、その3: 離婚、VI: 結、その1: 知識、その2: 決意、からなっている。

35) アレクサンドラ・アヴィエリノは、ペイルート生まれで、イタリア人との結婚前の名前は、アレクサンドラ・フリー al-Khūrī。アレクサンドリアで1898-1907年に『アニース・アル=ジャリース (傍らの友)』Anīs al-jalīs を発行する。エステル・モヤールも、ペイルート生まれで、結婚前の名前は、エステル・アズハリー al-Azharī。カイロにおいて1898-1904年、『アーイラ (家族)』al-Ā'ilah を発行した。女性雑誌としては、そのほか、現レバノン出身のキリスト教徒女性ルウィーザ・ハッバーリーン Luwīzā Ḥabbālīn の『フィルダウス (パラダイス)』al-Firdaus (カ

また、アミーンの強力な論敵になる、世俗的ナショナリストの経済人タラアト・ハルブ Muḥammad Ṭalʿat Ḥarb (1867-1941) や復古的イスラーム改革主義ジャーナリストのファリード・ワグディー Muḥammad Farīd Wajdī (1878-1954) など、エジプトやイスラームのあるべき姿を捜し求め、それぞれの道を歩み始めていた³⁶⁾。

イロ、1896) や、現レバノン出身のキリスト教徒サリーム・サルキース Salīm Sarkīs (1867-1926) がマルヤム・マズハル Maryam Maẓhar という女性のペンネームで出した『ミルアート・アル＝ハスナー (美人の鏡)』*Mirʾāt al-ḥasnā* (カイロ、1896-97) などもある。なお、エジプト人女性による最初の女性雑誌は、1901年創刊の、サアディーヤ・サアドウッディーナ Saʿdiyyah Saʿd al-Dīn による『シャガラトッドゥル』*Shajarat al-Durr* (アレクサンドリア、1901) [Baron, 1994:22] か、1907年創刊の、ガミーラ・ハーフェズ Jamīlah Ḥafīz による『リーハーナ (バジリコ)』*al-Rayḥānah* (ヘルワン Hilwān, 1907-08) である。

- 36) タラアト・ハルブは後にミスル Miṣr 銀行などを創設し、近代エジプト経済の父と称される人物だが、中流下層階級出身のナショナリストであり、中流上層階級出身のアミーンが唱えるような女性に関する急激な改革には反対の立場をとった。アミーンの『女性の解放』に対する反論として『女性のタルビヤとヒジャブ』*Tarbiyat al-marʾah wa-al-hijāb* (Cairo, 1899; 2nd ed., 1905) を、さらにアミーンの第2の女性論『新しい女性』への反論として『女性とヒジャブとに関する結語』を著す。また、ファリード・ワグディーはアブドゥの支持者だが、その保守派に属し、『女性の解放』に対して、「女性の解放」に対する一考察 *Naẓrah fī Taḥrīr al-marʾah* という論説を『ムアイヤド』紙上に2回に分けて載せ [al-Muʿayyad, Sept. 20, Oct. 1, 1899]、『新しい女性』に対しては『ムスリム女性』*al-Marʾah al-muslimah* (Cairo, 1912) を著す。そのほか、ナショナリストのムスタファー・カーメル Muṣṭafā Kāmil (1874-1908) も、アミーンの女性論を西欧的なものととらえ、『リワー (旗)』*al-Liwā* 紙上でアミーンの考えを批判する。さらには、アミーンの考えを反イスラーム的だと決め付けた保守的なウラマー ʿulamā (宗教諸学者) などを加えた『女性の解放』反対派が多数であったが、賛成派もアブドゥの支持者の中などに見られ、例えば、ファトヒー・ザグルールは『アングロ・サクソン人の発展の秘密』*Sirr taqaddum al-Inglīz al-Saksūniyīn* [E. R. Demolins 著 *À quoi tient la supériorité des Anglo-Saxons* の訳書] (Cairo, 1899) の序でアミーンの女性論『女性の解放』を支持する。また、大シリア出身者が大半を占めた当時のエジプトにおける女性の知識人たちは、ほぼ挙って賛成の手を挙げ、例えば、アレクサンドラ・アヴィエリノは彼女の『アニス・アル＝ジャリース』誌に『女性の解放』を賞賛する書評を書く [Avierino, “Kutub al-shahr wa-jarāʾiduhu, Kitāb Taḥrīr al-marʾah” *Anīs al-jalīs*, 2/5 (May 1899):192; idem, “Taḥrīr al-marʾah,” *Anīs al-jalīs*, 2/11 (Novem. 1899):406-11]。そのほか、現レバノン出身のラシード・リダー Rashīd Riḍā (1865-1935) も当初は『マナール (灯台)』*al-Manār* 誌に『女性の解放』をほぼ支持する意見を表明する [“Taqrīz Taḥrīr al-marʾah,” *al-Manār*, 2 (1899):282-4]。

以上、『女性の解放』までのアミーンの半生については、Zaydān [(1902), 1970:420 (426)-35]、al-Sayyid [1917:45-50]、Sufūrī [1928:684-8]、Haykal [1929:164-79]、Adams [1933:231-4]、Brockelmann [1942:330-1]、Khākī [(1944), 1973:1 sq.]、Bohdanowicz [1951:26]、al-Zirikī [(1954), 1979:V184]、Kaḥḥālāh [1957-VIII114-5]、Hourani [1962:164-7]、Fahmī [1963:7 sq.]、Sakākīnī [1965:5 sq.]、Drewes [1966:47-66]、Bahā al-Dīn [(1970), 1993:3-18]、Khalīfah [1973:27-9]、ʿImārāh [(1976), 1989:13 sq.]、Philipp [1978:278-9]、Rizzitano [1978:720-1]、Cole [1981:392-404]、Faraj [1985:63-70]、Awad [1986:101-2]、Abdel Kader [1987:54-72]、Hoffman-Ladd [1987:25-9]、al-Khuḍayrī [1987:5-39]、Baraka [1988:49-51]、Mitchell [1988:112-3]、Peterson [1992:ix-xii]、Abū Ḥamdān [1993:11 sq.]、Baron [1994:4-6]、al-Shaykh [1994:5sq.]、Badran [1995:18-9]、Zeidan [1995:15-21]、Nelson [1996:27]、Goldschmidt Jr. [2000:22-3]、Kurzman [2002:61]、al-Dusūqī [2004:7 sq.]、Pollard [2005:152-6] を主に参照した。(脱稿後、*Mīṣr ʿām ʿalā taḥrīr al-marʾah*, 2vols. Cairo: al-Majlis al-Aʿlā li-l-Thaqāfah, 2001 を入手できた。)

[参考文献]

- A'māl: 'Imārah, Muḥammad, ed. *Qāsim Amīn al-A'māl al-kāmilah*. 2nd (enlarged) edition. Cairo & Beirut: Dār al-Shurūq, 1989.
- Ḥarb, Muḥammad Ṭal'at. 1901. *Faṣl al-khiṭāb fī al-mar'ah wa-al-ḥijāb*. Cairo: Maktabat al-Taraqqi.
- Zaydān, Jurjī. 1902. *Tarājim mashāhīr al-sharq fī al-qarn al-tāsi' 'ashar*, I. Cairo: al-Hilāl [Beirut: Dār Maktabat al-Ḥayāh, 1970].
- Haykal, Muḥammad Ḥusayn. 1916. "Qāsim Amīn", *al-Sufūr*, 1/39: 1-2.
- al-Sayyid, Aḥmad Luṭfī. 1917. "Dhikrā Qāsim Amīn", *al-Muqtaṭaf*, 51: 45-50.
- Sufūrī [pseudonym]. 1928. "Dhikrā Qāsim Amīn wa-naḥḍat al-mar'ah al-miṣrīyah, Dhikrayāt tārīkhīyah", *al-Muqtaṭaf*, 72/6: 684-8.
- Haykal, Muḥammad Ḥusayn. 1929. *Tarājim miṣrīyah wa-gharbīyah*. Cairo: Maṭba'at al-Siyāsah wa-al-Siyāsah al-Usbū'iyah.
- Adams, Charles C. 1933. *Islam and Modernism in Egypt: A Study of the Modern Reform Movement Inaugurated by Muhammad Abduh*. London: Oxford University Press.
- Heyworth-Dunne, J. 1939. *An Introduction to the History of Education in Modern Egypt*. London: Luzac.
- Brockelmann, C. 1942. *Geschichte der Arabischen Litteratur*, Supplementband III. Leiden: E. J. Brill.
- (Khākī, Aḥmad. 1944. *Qāsim Amīn*. Cairo: Dār Iḥyā' al-Kutub al-'Arabīyah)
- Shāfiq, Durriyah & 'Abduh, Ibrāhīm. 1945. *Taṭawwur al-naḥḍah al-nisā'īyah fī Miṣr*. Cairo: Maktabat al-Ādāb.
- Lichtenstadler, Ilse. 1948. "The «New Women» in modern Egypt-Observations and Impressions", *The Muslim World*, 38/3:163-71.
- Bohdanowicz, Arslan. 1951. "The Feminist Movement in Egypt", *The Islamic Review*, 39/8: 24-33.
- al-Ziriklī, Khayr al-Dīn. 1954. *al-A'lām, qāmūs tarājim li-ashhar al-rijāl wa-al-nisā' min al-'arab wa-al-musta'ribīn wa-al-mustashriqīn*, V. Cairo: Maṭba'at Kustā Tūmās [4th ed. Beirut: Dār al-'Ilm li-l-Malāyīn, 1979].
- Kaḥḥālāh, 'Umar Riḍā. 1957-. *Mu'jam al-mu'allifīn tarājim muṣannifī al-kutub al-'arabīyah*, VIII. Damascus: al-Maktabah al-'Arabīyah.
- Ahmed, Jamal Mohammed. 1960. *The Intellectual Origins of Egyptian Nationalism*. London: Oxford University Press.
- Hourani, Albert. 1962. *Arabic Thought in the Liberal Age 1798-1939*. London: Oxford University Press.
- al-Sayyid, Aḥmad Luṭfī. 1962. *Qiṣṣat ḥayātī*. Cairo: Dār al-Hilāl.
- Fahmī, Māhir Ḥasan. 1963. *Qāsim Amīn*. (A'lām al-'Arab 20) Cairo: al-Mu'assasah al-Miṣrīyah al-'Āmmah li-l-Ta'līf wa-al-Tarjamah wa-al-Ṭibā'ah wa-al-Nashr.
- Sakākīnī, Widad. 1965. *Qāsim Amīn: 1863-1908*. (Nawābiḡh al-fikr al-'arabī 35) Cairo: Dār al-Ma'ārif.
- Drewes, G. W. J. 1966. "The Beginning of the Emancipation of Women in the Arab World", *Nederlands-Arabische Kring 1955-1965 Eight Studies Marking Its First Decade*, Leiden: E. J. Brill, 47-66.
- Tignor, Robert L. 1966. *Modernization and British Colonial Rule in Egypt, 1882-1914*. Princeton: Princeton University Press.
- al-Sayyid, Afaf Lutfi. 1968. *Egypt and Cromer A Study in Anglo-Egyptian Relations*. London: John Murray.
- Ghali, Ibrahim Amin. 1969. *L'Égypte nationaliste et libérale de Moustapha Kamel à Saad Zaghloul (1892-1927)*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Allen, Roger. 1969-70. "Writings of Members of «the Nāzli Circle»", *Journal of the American Research Center in Egypt*, 8: 79-84.
- Bahā' al-Dīn, Aḥmad. 1970. *taṣḍīr Taḥrīr al-mar'ah, Qāsim Amīn*. Cairo: Dār al-Ma'ārif [Cairo: al-Hay'ah al-Miṣrīyah al-'Āmmah li-l-Kitāb, 3-18, 1993].

- Khākī, Aḥmad. 1973. *Qāsim Amīn: tārīkh ḥayātihi al-fikrī*. Cairo: Maktabat al-Anglū al-Miṣrīyah.
- Khalīfah, Ijlāl. 1973. *al-Ḥarakah al-nisā'īyah al-ḥadīthah: al-mar'ah al-ʿarabīyah ʿalā arḍ Miṣr*. Cairo: al-Maṭbaʿah al-ʿArabīyah al-ḥadīthah.
- (ʿImārah, Muḥammad, ed. 1976. *al-Aʿmāl al-kāmilah li-Qāsim Amīn*, 2 vols. Beirut: al-Muʿassasah al-ʿArabīyah li-l-Dirāsāt wa-al-Nashr.)
- [Hamid,] ラウーフ・アッパース (藤田進訳) 1977「エジプトの婦人解放運動の歩み」板垣雄三 (編)『世界の女性史14中東・アフリカ II 閉ざされた世界から』評論社141-56.
- Philipp, Thomas. 1978. "Feminism and Nationalist Politics in Egypt", in Lois Beck and Nikki Keddie eds. *Women in the Muslim World*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 277-94.
- Rizzitano, U. 1978. "Kasim Amin", *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, IV: 720-1.
- Yūsuf, Ḥusayn Muḥammad. 1978. "Ṣilat al-ḥarakāt al-nisā'īyah bi-al-isti'mār", in Muḥammad ʿAṭīyah Khamīs ed. *al-Ḥarakāt al-nisā'īyah wa-ṣilatuhā bi-al-isti'mār*. Cairo: Dār al-Anṣār, 69-97.
- Muḥammad, Aḥmad Ṭāha. 1979. *al-Mar'ah al-miṣrīyah bayn al-māḍī wa-al-ḥādīr*. Cairo: Maṭbaʿat Dār al-Ta'līf.
- Waddy, Charis. 1980. *Women in Muslim History*. London: Longman.
- Cole, Juan Ricardo. 1981. "Feminism, Class, and Islam in Turn-of-the-Century Egypt", *International Journal of Middle East Studies*, 13:387-407.
- Kelidar, Abbas. 1981. "Shaykh ʿAli Yūsuf: Egyptian Journalist and Islamic Nationalist", in Marwan R. Buheiry ed. *Intellectual Life in the Arab East, 1890-1939*. Beirut: Center for Arab and Middle East Studies, American University of Beirut, 10-20.
- al-Shinnāwī, al-Sayyid Fahmī. 1982. "Ṣālūn Nāzli Hānim", *al-Hilāl*, 90/9: 40-8.
- Eliraz, Giora. 1982. "Egyptian Intellectuals and Women's Emancipation, 1919-1939", *Asian and African Studies* (Haifa) 16: 95-120.
- Smith, Charles D. 1983. *Islam and the Search for Social Order in Modern Egypt: A Biography of Muḥammad Husayn Haykal*. Albany: State University of New York Press.
- Tucker, Judith. 1983. "Problems in the Historiography of Women in the Middle East: The Case of Nineteenth-Century Egypt", *International Journal of Middle East Studies*, 15: 321-36.
- Yaḥyā, Muḥammad Kamāl. 1983. *al-Judhūr al-tārīkhīyah li-taḥrīr al-mar'ah al-miṣrīyah fī al-ʿaṣr al-ḥadīth*. Cairo: al-Hayʾah al-Miṣrīyah al-ʿĀmmah li-l-Kitāb.
- Gerner, D. J. 1984. "Roles in Transition: The Evolving Position of Women in Arab Islamic Countries", in F. Hussein ed. *Muslim Women*. London: Croom Helm, 71-99.
- Haddad, Yvonne Y. 1984. "Islam, Women and Revolution in Twentieth-Century Arab Thought", *The Muslim World*, 74/3-4:137-60.
- Cannon, Byron D. 1985. "Nineteenth-Century Arabic Writings on Women and Society: The Interim Role of the Masonic Press in Cairo—(Al-Lataʿif, 1885-1895)", *International Journal of Middle East Studies*, 17: 463-84.
- Faraj, Aḥmad. 1985. *al-Muʿāmarah ʿalā al-mar'ah al-muslimah*. al-Manṣūrah: Dār al-Wafāʾ li-l-Ṭibāʿah wa-al-Nashr.
- Awad, Louis. 1986. *The Literature of Ideas in Egypt*, I. Atlanta: Scholars Press.
- Abdel Kader, Soha. 1987. *Egyptian Women in a Changing Society, 1899-1987*. Boulder and London: Lynne Rienner Publishers.
- Hoffman-Ladd, Valerie J. 1987. "Polemics on the Modesty and Segregation of Women in Contemporary Egypt", *International Journal of Middle East Studies*, 19: 23-50.
- al-Khuḍayrī, Zaynab Maḥmūd. 1987. Qirāʾah jadīdah li-l-Mar'ah al-jadīdah, *Qāsim Amīn, al-Mar'ah al-jadīdah*. Cairo: Sīnā li-l-Nashr, 5-39.
- Badran, Margot. 1988. "Dual Liberation: Feminism and Nationalism in Egypt, 1870s-1925", *Feminist Issues*, 8/1: 15-34.
- Baraka, Iqbal. 1988. "The Influence of Contemporary Arab Thought on the Women's Movement", in Nahid Toubia ed. *Women of the Arab World*. London & New Jersey: Zed Books, 45-56.
- Mitchell, Timothy. 1988. *Colonising Egypt*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Badran, Margot. 1989. "The origins of feminism in Egypt", in Arina Angerman et al. eds. *Current Issues in Women's History*. London: Routledge, 153-70.
- ʿImārah, Muḥammad. 1989. *Biṭāqat ḥayāh, Dirāsah fī fikr Qāsim Amīn, Hādhihi al-aʿmāl, Qāsim Amīn al-Aʿmāl al-kāmilah*. 2nd (enlarged) edition. Cairo & Beirut: Dār al-Shurūq, 19-27, 31-112, 114-33.
- Ahmed, Leila. 1992. *Women and Gender in Islam: Historical Roots of a Modern Debate*. New Haven: Yale University Press.
- Peterson, Samiha Sidhom, tr. 1992. *Qasim Amin The Liberation of Women: A Document in the History of Egyptian Feminism*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Abū Ḥamdān, Samīr. 1993. *Qāsim Amīn, Jadaliyat al-ʿalāqah bayna al-marʾah wa- al-nahḍah*. Beirut: al-Sharikah al-ʿĀlamīyah li-l-Kitāb.
- Baron, Beth. 1994. *The Women's Awakening in Egypt: Culture, Society, and the Press*. New Haven & London: Yale University Press.
- al-Shaykh, Ghurayyid. 1994. *Qāsim Amīn bayna al-adab wa-al-qadīyah*. Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyah.
- Badran, Margot. 1995. *Feminists, Islam, and Nation: Gender and the Making of Modern Egypt*. Princeton: Princeton University Press.
- Zeidan, Joseph T. 1995. *Arab Women Novelists The Formative Years and Beyond*. Albany: State University of New York Press.
- Nelson, Cynthia. 1996. *Doria Shafik, Egyptian Feminist*. Gainesville: University Press of Florida.
- Talhawi, Ghada Hashem. 1996. *The Mobilization of Muslim Women in Egypt*. Gainesville: University Press of Florida.
- El Guindi, Fadwa. 1999. "Veiling Resistance", *Fashion Theory: The Journal of Dress, Body & Culture*, 3/1: 51-80.
- Al-Ali, Nadje. 2000. *Secularism, Gender and the State in the Middle East: The Egyptian Women's Movement*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldschmidt Jr., Arthur. 2000. *Biographical Dictionary of Modern Egypt*. Boulder & London: Lynne Rienner Publishers.
- Booth, Marilyn. 2001. "Woman in Islam: Men and the "Women's Press" in Turn-of-the-20th-Century Egypt", *International Journal of Middle East Studies*, 33: 171-201.
- Kurzman, Charles, ed. 2002. *Modernist Islam 1840-1940 A Sourcebook*. Oxford: Oxford University Press.
- 竹田新2002. 「カースィム・アミーン」『岩波イスラーム辞典』262.
- al-Dusūqī, Munā. 2004. *Qāsim Amīn Muṣliḥan ijtīmāʿīyan*. Beirut: Dār al-Fikr al-ʿArabī.
- Hatem, Mervat F. 2004. "The Nineteenth Century Discursive Roots of the Continuing Debate on the Social-Sexual Contract in Today's Egypt", *Hawwa (Journal of Women of the Middle East and the Islamic World)* 2/1: 64-88.
- Russell, Mona L. 2004. *Creating the New Egyptian Woman Consumerism, Education, and National Identity, 1863-1922*. New York: Palgrave Macmillan.
- Pollard, Lisa. 2005. *Nurturing the Nation: The Family Politics of Modernizing, Colonizing, and Liberating Egypt, 1805-1923*. Berkeley Los Angeles London: University of California Press.

【付 記】

拙稿「バルヒー学派について」『関西アラブ・イスラム研究』（現、『アラブ・イスラム研究』）第4号（2004年）pp. 77-93に2点の誤りがありました。訂正は以下のとおりです。

- ① p. 85 のイブン・ハウカルの世界図は、上下が逆。図の天地が逆
- ② p. 93 の参考文献 b 中の Miller の書名は、*Mappae arabicae: Arabische Welt-und Länderkarten des 9.-13. Jahrhunderts*